

他力易行道の行～他力信仰への誤解を解く～

2011年2月20日 於：神奈川集会

他力信仰への誤解を解く

【他力信仰をしても怠惰な人間にはならない】

神様に自分の生命をお任せすることと、何事も人任せにする怠惰とは違います。

神様にお任せしたからといって怠惰な人間にはなりません。これは実際に神様にお任せすれば分かることなのですが、神様に自己の運命をお任せしますと、何でも人任せにする依頼心のようなひ弱な想念は消え去ってゆくのです。なぜならば神はすべての生物を生かす大生命力であり、大宇宙を動かす大活動力であるからです。神に祈ることによって神の大生命力と一体になり、じっとしていられなくなるほどの活力が湧いてくるのです。怠惰とか疲労は業想念であり、祈り続けていればそうした業想念は消え去ってゆくものであるのです。他力行は、いつまでも他力のままでいるのではなく、自然に神我一体の絶対力となり、力強い人間として現れてきて、自主的に行動しながら、しかも他の人々と調和してゆくことができるのです。真実の他力信仰、守護霊への祈りは、怠惰な人間や依頼心の強い人間を作り出すことはありません。

【自分でできることは自分でやらなければならない】

肉体の自分でできることは自分でやらねばなりません。自分のことは自分でやるのが常識です。何もかも自分一人でやることは不可能ですが、自分でできることは自分でやらねばなりません。それは当然のことです。神様に任せたからといって、守護霊がご飯を食べさせてくれるわけではないし、守護霊が自分の代わりに会社に出勤してくれるわけでもありません。自分で自分の顔を洗い、自分で食事をして、自分で歩き、自分で働き、自分の力で自分の身を守らなくてはなりません。自分でできることは、すべて自分でやらなくてはなりません。自分の行為には自分で責任を取らなくてはなりません。自分の行為を常に反省することも必要です。他力信仰は無責任になることでもないし、無反省の人間になることでもありません。自分の行為は自分で反省し、自分で責任を取らねばなりません。

【肉体人間の自分にできない事がある】

それでは、なぜ神様に任せるかと言いますと、肉体の自分の力で「できること」と「できないこと」があるからです。「肉体の自分にできないこと」とは、自分の運命の修正です。自分の運命の修正は自分の意思力だけでは難しいことなのです。暗い性癖を明るい性格に変えること、短気で怒りっぽい性癖をなくし、のんきで穏やかな性格にすること、そのいずれも容易ではありません。貧乏な暮らしを感謝の暮らしへ変えることも難しいことです。病気がちの身体を健康な身体に変えることも難しいことです。戦争で争いに満ちたこの世界を平和な世界へと変えるのも、肉体人間だけの力では難しいことです。自分の意思力で神の子の自分を顕現することも、自分の環境や運命を変えることも、不可能に思え

るほど難しいことです。肉体人間には難しい、できないことを、守護の神霊の霊力で助けていただくこと、私たちは神に祈るのです。

【肉体人間の努力と守護霊の応援の力の一致協力によって最大の能力を発揮できる】

肉体人間は何もかもできるわけではありません。だからこそ守護霊が守っているのですが、肉体人間ができないことでも、守護霊にはできることがあるのです。それが肉体人間の運命修正であるのです。肉体人間自身にはどうにも変えられない運命も、霊界にいる守護霊が操作すれば、肉体人間の運命を変えることができます。たとえばA子さんが道を歩いている、背後から来たオートバイに乗った男にハンドバッグを取られそうになったとします。この場合、A子さんが日頃から守護霊に感謝していて、守護霊の加護の力が強く働いておると、ハンドバッグを取られずに無事にすむということがあるのです。しかし、守護霊の存在を信じないで感謝していない人は、業の力のままに盗難に遭ってしまいます。守護霊の存在を信じる人と信じない人とでは、このように大きな差となって現れてくるのです。といて何から何まで守護霊に甘えてやってもらおうとしても、それは駄目なのです。肉体人間の努力と守護霊の応援の力が一致協力して人間は最大能力を発揮できるようになるのです。

【参考：他力易行道は明るく力強い道～五木寛之の他力観と真の他力～】

もっとも他力思想にも色々あります。たとえばよく読まれている作家の五木寛之の宗教観は、「消極思想、マイナス思考のすすめ」を説いているから、若い人が五木さんの本を読むと暗くなってしまい、虚無感のようになって、やる気がなくなってしまうことがあるのです。五木さんは作家として有名な人で、私も昔から彼の小説を読んでいるけれど、本当の他力思想が彼には分かっていないのです。積極思想の欠陥を見抜いて他力への可能性を説いている点は大した洞察力なのですが、他力の真実の意味を悟るまでには至っていないのです。簡単に言うと、「他力が絶対力に変換する原理」を五木さんだけでなく他の多くの宗教者も知らないわけなのです。他力易行道は虚無思想でも消極思想でもなく、明るい力強い道なのです。

神の子としての尊厳を放棄するな

霊視と言っても、一体どの程度の霊視か、霊界を見ているのか幽界を見ているのか、それとも幻覚を見ているのか、はたまた妄想にすぎないのか、人によって様々です。霊視と言ってもはいても、多くは「こうした映像を見たい」という欲望からくる夢のような幻覚にすぎません。「こんなものを私は見た」と言って自己を顕示したい、自慢したいという欲望から霊視のような幻覚を見ることがあるのですから、すべてを「消えてゆく姿」として「世界平和の祈り」の中に投げ入れてしまうのが安全です。本物の霊視ならば、どんなに「消えてゆく姿」にしても消えませんが、「世界平和の祈り」をしても消えない霊視ならば本物と思ってよろしいでしょう。ほとんどの場合は、守護霊のみ心は、霊視や霊聴で「ああしなさい、こうしなさい」と命令口調で指図するのではなく、自然法爾（じねんほ

うに)に、さりげない直感的行為となって現れてくるものなのです。

「あなた方は神である」と宣言しておきながら、その一方で、「今、宇宙神からこんなご指示がありました。皆さん、こうなさい」と説いている宗教者がいますが、これほど馬鹿げた矛盾した話はありません。神である人が、なぜ神に命令されて、いちいち言われた通りに動かねばならないのでしょうか。他人の言動に振り回され、神示のままに命令される神など存在しません。

人間は神の子であるのですから、他人に命令されて動くような、そんな奴隷のような弱々しい意気地のない存在ではないのです。神の子である人間が、なぜ他人や神に命令されて動くのか。そんな馬鹿げたことはない、と私は言うのです。自らの自由な意志で自由に動けるからこそ神の子としての価値があるのです。神の声や神示や宇宙神に惑わされて、神の子としての尊厳を放棄してはいけません。こうした誤ったことを教える宗教者もおかしいけれど、その誤った教えを聴いて、なんの疑問も抱かずに、素直という美名の下に、その誤った教えに易々と従う信者もまた頭がどうかしているのです。このように直感だけでは間違うことがありますから、知性や常識を働かす必要もあるのです。

光明思想の行とは

【自然に神人になれる理由】

「世界平和の祈り」がなぜ神人顕現に効果があるかと言えば、それはこういうことです。

神様は「世界人類よ、平和であれ」と思っているわけです。それに対して、人間側が「神様、世界人類が平和でありますように」と祈りますと、神様の愛のみ心と人間の願いがピタッと一つに合いまして、一瞬でも神我一体になるわけです。そうしているうちに神我一体観が次第に深まってきて、「神人になろう」と力んで思わなくても、無理せずにいつしか自然に神人になってゆくわけです。

簡単でしょう？ たったこれだけの話なのです。難しいことは何一つないのです。ただ問題は、「世界平和の祈り」を本人が信じるか信じないか、それだけなのです。

【光明思想の行とは「世界平和の祈り」なり】

反省は毎日必要ですけれど、罪を悔い改める懺悔は一回でよろしいのです。五井先生のみ教えを知って、守護霊の存在とそこをご加護を知った人は、守護霊様のお働きを知らなかった罪が消えたのですから、もう懺悔する必要はありません。守護霊様への感謝のお祈りを続けていればそれで構いません。

そして、「世界平和の祈り」を祈れば自然に人間の心が光明化してゆくのですから、「世界平和の祈り」を祈ることが光明思想の実践であるのです。「世界平和の祈り」以外に光明思想の行などはないのです。世界平和の祈りを祈り始めたことにより、あなたの本心開

発への道の第一歩が始まったのです。

他力道の他力行とは

【積極思想とは違う他力の行】

積極思想というのは、「これができる」「これをしよう」「これをしなければならぬ」「これを心に描かねばならぬ」「成功を疑ってはいけない」と積極的思考を念じてから行動し、消極的な想いについては「これを思うまい」「これはするまい」と思ってしないようにするわけです。この方法以外に成功する方法はないと人は普通考えるわけです。

ところが、老子は「そんな積極的生き方（ポジティブシンキング）などまだまだ不自由な生き方であって、強い生命力を発揮することはできない。『これをしなければならぬ』『これを心に描かなくてはいけない』『これを思わなくてはならぬ』『これをしてはいけない』『これを思ってはいけない』という想念があるうちは、自分の自由を束縛しているのだから不自由なのである。『これをしなければならぬ』『これをしてはならぬ』という想念がある間は真実の自由は得られない。無為とはそうした想念で行為するのではなく、本心そのものが行為となって現れる生き方を言うのだ」と説くのです。

朝は起きなければならない、学校へ行かなければならぬ、会社へ行かなければならぬ、勉強をしなければならぬ、仕事をしなければならぬ、この知識を覚えなければならぬ、誰かに会わなければならぬ、どこかへ行かなければならぬ、掃除をしなければならぬ、洋服を買わなければならぬ、お金を儲けなければならぬ、お風呂に入らなければならぬ、夜は寝なければならぬ……もううんざりするほど私たちの日常生活は、この「ねばならぬ」という想念でがんじがらめになっています。この上に宗教の「ねばならぬ」行事が加わったら、宗教をやったが為にますます不自由になってしまいます。

もしこの「ねばならぬ」という想念がなくて自然に行為できたら、どんなにか楽しい人生となるでしょう。自然に起きたい時に起き、自然に学校や職場に行き、自然に勉強して、自然に遊びたい時には遊んで、自然に好きな時に好きな所へ行けて、自然に食べたい時に食べたい物を食べて、自然にお風呂に入りたい時に入って、自然に寝たい時に寝る。それでいて社会の秩序を乱すこともなく、人並み以上の豊かな生活ができる。それが欲望のままの生活ではなく、神のみ心のままの無為の生活になっているのです。

頭でいちいち考えて、心を働かせて事に当たらなければならぬと、人々は長い間思いこんできているのです。それが人間の当然の在り方だとされているのですが、老子は、「肉体頭脳の小知才覚ではこの三界の苦の境界を抜け出すことはできないのだから、欲望想念に把われず、空の境地になりきりなさい。空の境地から光明心がそのまま現れてくるのだ。空の境地になれば、『これをしなければならぬ』『あれをしなければならぬ』という義務感や強制感からではなく、すべての行為について、自由自在に己の本心の欲する通り

になんでも現すことができ、本心の欲する通りに行為することができるのだ」と、無為の境地の素晴らしさを説いているのです。

ところで、五井先生は『老子講義』の中で、「無為とは、これをしなければならぬと思っ、するのではない」と説きながら、別の箇所では「私たち日本人は、ひたすら、世界完全平和達成の道を、只一筋に進みつづけてゆかねばならないのです」というふうに、「ねばならない」とも書かれています。この一見すると矛盾と思われる二つの文をどのように解釈したらよいのでしょうか？

その矛盾を解き明かしますと、無為の境地になりますと自由自在に行動できるのですが、その無為の境地になるためには、その前に「守護の神霊に全託しなければならない」という他力の行が必要であると私は考えるのです。他力道というと、「神様にお任せして、自力では何もしないこと」と解釈してもよいのですが、神様にお任せする行が存在することを忘れてはなりません。神様に他力する行を他力行というわけです。他力道には行が全くないわけではないのです。

とって、他力道の他力行なのですから、もちろん難しい方法ではありません。「世界平和の祈り」に全託する行が今日の他力行であるのです。無為にして成す境地になるためには「世界平和の祈り」を祈らなくてはなりません。しかし、「これをしなければならぬ」と思うのは「世界平和の祈り」一つだけでよいのですから非常に楽な行なのです。

その他力行について釈尊は弟子の阿難に対してどう説いたのか、次に『浄土三部経』を読んでみましょう。

【他力行の始まり——「南無阿弥陀仏」と唱えた阿難——】

仏、阿難に告げたもう

「無量寿仏、威神（いじん）きわまりなし。十方世界の、無量、無辺、不可思議のもろもろの仏、如来、称歎（しょうたん）せざる者なし」

というように、釈尊は阿難に対して無量寿仏（阿弥陀仏）の神力を称賛しているのです。

仏、阿難に告げたもう

「汝よ、たちて衣服（えぶく）をととのえ、合掌し恭敬（くぎょう）して、無量寿仏を礼（らい）したてまつれ。（そのゆえは）十方国土の、もろもろの仏、如来、常に共に、かの仏を称揚し讚歎（さんだん）すること、無著（むじゃく）、無礙（むげ）なる（言説）をもってすればなり」

次に釈尊は、阿難に対して「無量寿仏（南無阿弥陀仏）を礼拝しなさい」と勧めます。

ここに阿難、たちて衣服をととのえ、身を正しくし、面（おもて）を西にし、恭敬（く

ぎょう) し合掌し、五体投地 (ごたいとうち) し、無量寿仏を礼したてつまりて、もうして言う

「世尊よ、願わくば、(われ) かの仏の安楽国土 (あんらくこくど) と、およびもろもろの菩薩、声聞 (しょうもん) の大衆を見たてまつらん」

釈尊に勧められた阿難は、言われた通りに西に向かって無量寿仏を礼拝し、「できますならば、仏様の安楽国土の様子とその平和な国に住んでいる菩薩様のお姿を見せて下さい」と願ったのです。

この語を説きおわるや、その時、無量寿仏、大光明を放ちて、あまねく一切の諸仏の世界を照らしたもう。…その時、阿難、すなわち無量寿仏を見たてまつるに、威徳 (いとく) 巍巍 (ぎぎ) たること、須弥山王 (しゅみせんおう) の、高く一切のもろもろの世界の上に出 (い) ずるがごとし。相好 (そうごう) (より放つ) 光明、照曜 (しょうよう) せざることなし。

すると、阿難がそう言い終わったかと思うと直ぐに、無量寿仏が大光明を放って諸仏の世界を黄金の光で照らし出して見せて下さったのです。無量寿仏のお姿の威徳は天に達するほどの最も高い山のように気高く、そのお姿から発する光明は無限の仏国土を照らし満たすほどのものであった、というのです。

法蔵菩薩の四十八願の十七番目に「…わが名を称 (たた) えずんば、正覚 (しょうがく) を取らじ」という誓いがあるのですが、これは言いかえると、「仏として、わが名を唱える、すべての者を救う」という意味で、十八番目には「十方 (じっぽう) の衆生 (しゅじょう)、…わが国に生まれんと欲して、乃至 (ないし) 十念 (じゅうねん) せん。もし、生まれずんば、正覚を取らじ」とあります。やはりこれも、「わが名を唱える者はみな、極楽往生を遂げさせてあげよう」という意味で、この二つは四十八願の中でも特に浄土門の拠り所となる教えで、法然は第十八願を「念仏往生の願」とし、「本願中の王」と呼んでおります。また、阿難が釈尊に言われて「南無阿弥陀仏」を唱えたとされますが、これが他力の始まりであったのです。親鸞は、「南無不可思議光如来」「帰命尽十方無礙光如来」とも称しましたが、無量寿仏 (阿弥陀仏) の計り知れない大光明や功德の力を言い表したかったのでしょう。

現代において「世界平和の祈りを祈るところに救世の大光明が現れる」と五井先生が説かれているのは、「阿弥陀仏の名を唱えると大光明が現れる」という仏典と同じ原理であり、世界平和の祈りは、阿弥陀仏を含むすべての神霊が集団となって結集した大光明であるのです。

老子が教える他力道

【老子の無為の教えとは？】

五井先生の『老子講義』をお読みになった方は、老子の説く無為について、その意味は知識としてはご存じと思いますが、無為について体験として知っている人はまだまだ少ないようです。そのために、「何もしようと思わないでできるはずがない」「何もしないでできるわけがない」「成功するには欲する物を強く念じなければ得られるはずがない」「何かをしようと思ってこそ成功できるのだ」「『私はできる』と思わなければできない」「『私はやってみせる』と思わなくてはできるものではない」という発想が出てくるのです。このような発想をする思想家は無為の境地を知らないのです。

無為とは、釈尊の説く色即是空・空即是色と同じ境地のことなのですが、釈尊は業想念をなくす法を説いているのに対して、老子は自力の行為を徹底的に否定しているのです。インドから釈尊の教えが中国に入ってきた時、翻訳者が釈尊の教えを中国語に翻訳する段階で老子の教えを巧みに取り入れたので、仏教を学んだ法然親鸞は同時に老子の教えも学んで他力に徹したのです。

普通の人間は「こうしよう、ああしよう」と思いながら生活しているわけですが、心臓が「動け動け」と念じなくても自然に動いているように、本来は知恵も行為も、瞬時にして必要な時に応じて必要な知恵が湧いてきて、適切な行為ができるようになっています。想念と行為の間に一瞬の隙もないのです。神体から伝わってくる神智がなんの業想念の妨げもなく肉体に伝わってくるのです。つまり、思った時には既に行なっているのです。

この無為の境地にいる人は、宇宙の法則に乗っているのです。無為の境地にいる人を傷つけようとする者は自ずと倒れてゆくのです。たとえば普通の常識では、相手が拳で自分の腹を殴ってきた場合、それを交わしてよけるわけですが、無為の境地になった人は、自分の体を少しも交わさなくても、微動も動かさずして、殴ってきた相手の拳が自分の体に触れる前に方向転換して、それで行ってしまうのです。相手の拳の殴ってくるスピードが早くなればなるほど、ちょうど野球の投手がカーブのボールを投げたように、ククッーと相手の拳がカーブを描いてそれゆくのです。こんなことは普通の人はとても信じられないと思いますが、欲望想念を無にし、自力想念を無にして守護の神霊に全託しますと、自己の波動が微妙になってゆき、業想念の粗い波動を受けなくなり、こうした奇蹟的なことが次々と起きてくるのです。この素晴らしい境地を教えようと、老子は無為の教えを説いたのです。無為とは、ただ単に何もしないでぼんやりと怠惰に過ごしているということではなくて、自力で行為をしないという意味なのです。

しかし、「自力でするな」と言われても、なんのことか分かりません。それは言いかえますと、「自力を使わず、守護の神霊に全託して生きなさい」という教えであるのです。守護の神霊に全託しますと、「無為にして為す」、自力ではなく絶対力である神力で為すようになり、「為さずして成る」、自力で為さずして神のみ心が自然法爾に現れてきて、

必要な物事がすべて成就されてくるのです。無為とは神の力なのですから、「無為にして成さざるは無し」、無為の境地になりますと、「こうしよう、ああしよう」と自力で感じなくとも、できないことは何もないという自由な境地になるのです。

そして、その素晴らしい無為の境地になるには、いつも申しておりますように、守護の神霊に感謝し、「世界平和の祈り」を祈り続けることなのです。「世界平和の祈り」を祈り続けてゆきますと、力まずとも、ひとりで神のみ心にかなった愛と調和の行ないができるようになってくるのです。

老子さん、ありがとうございます。

世界人類が平和でありますように

【無為の境地に至る法】

【ご質問 1】

以前は、凡夫にはまったく行き着くことができないであろうと感じておりました「無為の境地」ですが、森島先生に説明をしていただけると、私などでも正しい祈りとしての統一を深く深く深くやっていたら、ひよっとすれば今生で行き着くことも無理とは言えないかも知れないと思ってしまったのですが、甘い考えでしょうか？ このような境地に行き着くために、私の場合、祈りを日々行ずることに加えて、どのようにすればよいでしょうか？

【お答え 1】

老子の教えの「無為の境地」の解説と、日常生活の中でどうしたら無為の境地に近づいてゆけるかを具体的に申し述べることに致しましょう。

以前、私は白光真宏会の中でも古い講師に、「老子は無為になることを説いているのに、昌美先生は『このような行をなさい、あのような行をなさい』と老子の無為の教えとはまるで逆なことをおっしゃっています。〇〇講師は無為とはどういう意味だとお考えですか？」と質問したことがありました。その頃には私は既にすべてを知っておりましたが、その古い講師のお考えを知りたくて、そんな質問をしたのです。するとその講師からは、「老子の教えは高過ぎて私たちにできることではありません。無為の教えは難しく誰にも理解できませんし、なれるものでもありません。ですから、私たちは昌美先生の教えをやっていけばいいのです」と訳の分からないお答えが返ってきました。納得のできるお答えではありません。しかし、集会の中でそれ以上追求すると講師に恥をかかせることになると思い、私は黙ることにしました。会の中で指導的な立場にあった古い講師でさえこのような理解の程度なのですから、他の講師も似たりよったりの答えしかできないと思います。

このように、老子の「無為」の意味を知っている人は案外少ないのです。老子は道德経の中で「聖人は…」と常に聖人の生き方を説いているのですから、その聖人の行為を実行

しようとするれば、それは大変な難しい行となります。ところが老子は、「わしは聖人の生き方を指し示しているが、そうなるための方法を『無為の教え』として説いている。『こうしなさい、ああしなさい』と念じてやるのは難しいが、『自力で何もするな』というのだから、わしの教えほど実は易しい教えはないのだ」と説いているのです。

老子道徳経が難しい漢字で書かれていることもあって、現代人には初めから難解な書物だとして敬遠してしまう人が多いのですが、この書で一貫しているのは、「自力で想うな、自力で行なうな」という徹底した自力否定の教えなのです。それは、肉体知の自力でどんなに力んで成功したところで、神智による成功に比べれば雲泥の差であるのだから、自力で物事を為そうという想いを捨て、宇宙根源から湧き出でる絶対力によって物事を為してゆきなさい、という教えであるのです。

.....
老子の自力否定思想は次の教えに表れています。

【老子】

吾（われ）、あえて主（しゅ）とならずして、客（かく）となる。（吾不敢為主而為客）

【解説】

自分は自力の想いで敢えて無理に攻めるようなことは一つもない。お客様として招かれたように、私は常に天に任せて、天の心のままに守る行為をしているのである。

【老子】

あえて天下の先（せん）と為らず。ゆえによく器長（きちょう）をなす。（不敢為天下先。故能成器長）

【解説】

また、自己の知恵能力を頼んで、天下の先頭に立とうとするようなことはしない。欲望を持たぬから、誰もがその大きな心に引き入れられて、どんな多くの人々も統括できる長官になることができるのである。

【老子】

多言（たげん）なれば、しばしば窮（きゅう）す。中（ちゅう）を守るにしかず。（多言数窮。不如守中）

【解説】

天地は無限の力を持っているけれど、その力は常に宇宙の法則に乗って出されているのであり、やたらに出せるだけ出しているものではない。ところが人間は、自己の与えられ

た能力をわきまえずに「私はできる」とおしゃべりをしていると、嘘をつくことになり、信用がなくなって、しばしば窮地に陥ってしまうものである。だから話す場合も、自力で自己の能力を超えた無理なことを話すのではなく、中庸の道を守って、正直に自己の能力の範囲で話さなくてはならない、というのです。

【老子】

みずから為さず。（不自為）

【解説】

「自力で為さず」という意味で、ここに自力否定の思想がはっきりと表れています。

【老子】

為さずして成る。（不為而成）

【解説】

「自力で為さずとも、自然（じねん）の力によって物事が成る」という意味です。「自力でやらなくてはできない」とほとんどの人間は考えているわけですが、自力の想いを使わなくとも自然に成る境地がある、というのです。

【老子】

聖人は、為すこと無し。ゆえに敗るる無し。（聖人無為。故無敗）

【解説】

「聖人は自力でやることはない。常に天意のままに自然に行なっている。だから、失敗することもないのだ」というのです。

.....

自力否定ということは、言いかえると、天意に任せる、宇宙自然の道に任せる、という他力の生き方を強く主張しているわけで、老子は自力否定論者であり、他力肯定論者なのであります。自力を否定することによって他力の生き方を強く肯定しているのです。法然親鸞の他力の教えが他力そのままを素直に説いた教え方であるのに対して、老子は自力を徹底的に否定することによって他力の素晴らしさを強調し、「天に任せよ」と他力の道を説いているのです。無為とは自力否定道であり、つまりは他力道に他なりません。そう考えれば、法然親鸞の念仏の他力易行道と同じなのですから、今まで難解と想われていた老子の教えがぐんと身近になり、分かりやすくなっていくと思います。

この無為の境地に至るためには、守護の神靈に全託する「世界平和の祈り」の道がやはり最も易しいのです。この境地に行き着くために、「世界平和の祈り」以外の特別な行法をやる必要はありません。この世の人生を生きてゆく上で、何も目標を持たず、何も計画を立てないで生きてゆくというわけにはゆきませんから、目標や計画を立ててもよいので

す。但し、「世界平和の祈り」を祈ってから目標や計画を立てるようにすることが肝腎なのです。一度お祈りをして守護の神霊に全託してから頂いた目標や計画は、自力のものではなく、神様から頂いた目標や計画となるからです。また、一度立てた目標や計画も、日々「世界平和の祈り」の中に入れて頂き直しておりますと、過去において定めたことに把握されず、臨機応変に、目標や計画を現在の状況に合わせて、より優れた目標や計画に変更できるようになるのです。そうした自由自在の生き方は「世界平和の祈り」の中から生まれてくるのです。

「守護霊様、あなたさまのみ心のままに、私の人生を設計して下さい」

「守護霊様、私の天命が完うされますように、目標計画をお授け下さい」

こうした祈り心で、自分の目標や計画を一度神のみ心にお返しして、神様のみ心の中で浄化していただき、神様から改めて自分の目標計画をいただき直すのです。このように祈りながら目標を達成してゆくうちに、いつしか無為の境地に達して、聖人、大人物となることができるのです。これが日常生活そのままに常識的に生きながら、しかも無為の境地に至ることのできる易しい方法であるのです。

【孔子と老子】

五井先生が、論語で有名な孔子（こうし）よりも老子（ろうし）を高く評価しているのは、孔子の教えは宗教ではなくて修養の教えであって、自力の範囲を超えてはいないからです。孔子には「徳を積まねばならない、徳を積もう」という意識があるのですが、老子は、「徳を積もうと思って徳を積むのは為（ため）にする行為であって、そんな行為は下徳というのだ。何も報いを求めず、何かを得ようとも思わずに、為（ため）にしないで純粹に愛する行為こそ上徳というのだ」と、無為自然（むいじねん）の生き方を説くのです。

老子には、孔子の教えを明らかに批判していると思われる文章があります。老子は、「仁や義をも捨てなさい。『人間最高の境地になろう』という想念があるうちは、そうなりきってはいないのだから、そこにはそれだけのマイナス面が出てくる。義の心になり、仁の心になりきっていけば、今さら『義の人になろう』『仁の心になろう』ということもない。愛深い人間になろうと思っている間はまだ愛深い人間にはなっていないし、正しい心を持つようと思っている間は、その人は正しい人間にはなりきってはいないのだ」と説いて、孔子の仁義の教えを批判し、無為自然の道を説いているのです。

また、「自分がいかに感謝しているかを人に見せるために、やたらに感謝、感謝と形式的に感謝行をして見せたりするのは、自力の感謝行であって、真実の心から出た感謝ではない。『神の子になろう』として『私は神の子である』と唱えていても、まだ神の子になりきってはいないのだから、そこに様々なマイナス面の弊害が出てくる。そのように、『感謝の心を得よう』『神の子になろう』としている間は真実の感謝の心境にはなれないし、永劫に神の子にはなれないのだ」とも老子は説いているのです。

「『何をしよう』『どう生きよう』『どんな人物になろう』という思いがなくて、どうしてできるのか、どうしてなれるのか。できるわけがないではないか、理想の人物像になれるわけがないではないか」と、普通人は誰しも思います。そこで、「老子の教えは分からない」ということになるのです。

「そうなるという想念があるうちは、そうなりきってはいないのだ」
今日はこの言葉だけを理解すればよろしいでしょう。

【老子と釈尊】

老子の教えが浄土門指導者にどのように受け入れられ、過去の浄土門修行者たちはどのような他力行をしたのか、「孔子と老子」に続き、『浄土三部経』を取り上げましょう。

『無量寿経』には、釈尊の阿難への法話として、阿弥陀仏となる前の法蔵（ほうぞう）菩薩の四十八願が述べられています。そして、阿弥陀仏と浄土の姿を釈尊は説き、阿難も「われ、この法を疑わず。ただ、将来の衆生のために、その疑惑を除かんと欲して、ことさらにこの義を問いたてまつるのみ」と釈尊に尋ねています。阿弥陀仏は無量寿仏とも言われるので、無量寿経と付けられているわけです。阿弥陀仏の住む浄土を称して、釈尊は「無為自然（むいじねん）の世界である」と説いているのです。

釈尊が老子の言葉を説いているというのは不思議なことで、これはもちろんインドの古代語（サンスクリット語）を中国の漢文に翻訳する時に、翻訳者が老子の教えに造詣が深く、翻訳するのに適当な言葉が見当たらなかったこともあるでしょうが、その時の無名の翻訳者が、釈尊の空の境地と老子の無為の境地が同じ意味と価値を持っていることを確信していたからなのです。こうして仏教に老子の思想が巧みに取り入れられたことによって、阿難の他力門が中国においてよりはっきりとした形になってゆくのです。老子の「自力否定論」が加わったことにより、仏教の「他力道」が強力な力を得たわけです。